福竜丸だより

都立・第五福竜丸展示館ニュース

発行
(財)第五福竜丸平和協会
〒136　東京都江東区
夢の島３－２
都立第五福竜丸展示館内
電話 03-3521-8494

ビキニ事件直後、焼津追想

佐藤 猛夫

一九五四年三月一日アメリカのビキニ水爆実験による第五福竜丸被災事件は日本全国を震憾させました。誕生間もない東京民医連は新日本医師協会等と相談し、現地の慰問と調査のため三月十九日早朝、国民救援会の(故)難波会長を団長に民医連の高倉理事と医師一人、新医協の(故)久保事務局長、代々木病院の唐沢事務次長の五人で焼津市へ出発し、その夜遅く帰京しました。その情況報告の大要は次のようでした。

「焼津の街はふだん漁港・魚市場・魚屋の店頭などで、元気のよい呼び交う高声が響いているのに今はどこもひっそり。原爆で魚が半値、商売上ったり、人々は不安と生活問題で事件をなるべく過小に見たい気分もあったのでしょう。然しマグロの荷上げや運搬の人夫にも放射能が検出されたという報道が拡がると損害賠償要求の声も…。一方政府当局はアメリカに対する世論が烈しくなるのを抑えている…。

港に近づくと岸壁附近一帯、有刺鉄線がはりめぐらされ『危険立入禁止』の札と正服警官がたっていて入れない。仕方なく調査慰問団は車で協立焼津病院に行った。玄関には新聞記者や県庁の役人、それに警官も来ている。それに交ってマグロを食べて心配という何人かの受診相談に来ている人もいる。受付の係りは『大丈夫ですよ』といっころへ病院の大井先生が外出から帰って来たので東京からの来意を告げると心よく被災者の病室を案内してくれた。新聞記者や役人、警官一人も。病室は十畳の部屋に四人、十一畳に十人の被ばく者がつめこめられていた。頭は丸坊主、皆青い顔をして、皮膚は処々斑点が見える。大井先生も『白血球の減少しているのは確認したが治療法は…』と。団の一行が患者に来意をつげ容態をたずねると、不安な表情ながら『こんな恐ろしかったことはない』『アメリカの医師には診てもらいたくない』『モルモットになるのはもう沢山だ』と言っていた」と。

以上のような調査団の報告を受けて民医連、新医協の役員達で相談した結果『我々はガイガーカウンターもない、死の灰分析も出来ないが血液・白血球検査で広く焼津市民、漁業関係者の健診・検査をやろうということになり、神奈川民医連にも呼びかけ江東診療所の木俣所長を団長として医師・検査技師・看護婦の総勢二十数人が夫々の所から顕微鏡、検血の器具をもちよって四月十七日焼津に向った。翌日から毎日数ケ班に分れ一軒一軒の家を訪問し慰問と検診を大へん喜ばれながら十数日間奮闘し、二百人以上の検血を行い少なからぬ白血球減少者を発見し、再度の精検を勧める等大活躍をしました。

私は当時渋谷区議もしていたので三人の社会党区議と相談し、四月十六日の臨時区議会で提案して『原水爆実験及び使用は今後一切禁止して貰いたい』という決議を満場一致でおこない、国連本部及び米・ソ・英に送付されました。区議会を終って翌々日、私は、焼津調査団に加わり十九日区議の名刺を利用して運よく同行の看護婦と一緒に岸壁に入ることが出来、折から入港していた第二共和丸(?)に乗りこみ、甲板上の水夫さんと話しあい、この人たちを健診・検査することが出来ました。三、四日後、私が焼津から帰京した頃は全国の原水爆禁止の世論は一層高まっており、特に隣りの杉並区では安井郁氏や著名文化人を中心に地域運動が大きくもりあがっていました。

ビキニ事件直後のこの初歩的な小さな運動も原水爆禁止を要望する医師の会の一部につながって行き、翌年六月の「放射能影響国際学術懇談会」を成功させ、遂に八月六日の原水爆禁止世界大会という大流に発展していったと思います。（代々木病院名誉院長）

船を愛し、平和と人と地球を愛し…

和歌山・東北各県から修学旅行

「平和を愛し、人を愛し、地球を愛し、私たちは手をつなぎ、私たちの地球を守っていこう。

緑があふれ、鳥は自由に飛びまわり、大気と水もすみわたり。

平和を愛し、人を愛し、地球を愛し、みんなが幸せにくらせる、母なる星地球を愛し守っていこう」

四月十六日、和歌山県串本町の和深中学校二十名の修学旅行のみなさんの四部合唱がさわやかに船にこだましました。三年生の石倉志保さんが作詞、同校の玉田真弓先生が作曲した『第五福竜丸に捧げる詩』です。一人ひとりが願いをこめて、名前とひとことのメッセージを記した寄せ書きやいくつかの詩も色紙に書いて　合唱後に贈呈されました。お隣の潮岬中学校六二名の三年生もあいついで訪れ、黒潮の大きな流れに乗るかのように今年も五月にかけ来館する和歌山県の修学旅行の初だよりになりました。

東北の中学校の来館も多く、山形・宮城・岩手県からの修学旅行もあいつぎました。岩手県からは岩手郡・紫波郡・西磐井郡・盛岡市・一関市・花巻市などから十余校が来館、見学後作文や折鶴を贈った松尾村の中学校など、みんな熱心な見学でした。

訪れる人でにぎわったゴールデンウィークの展示館

NHKの特別番組も

四月一九日夜、テレビのNHKスペシャル『又七の海ー死の灰を浴びた男の三十八年』が放映されました。その反響も大きく、翌日から激励、見学の問い合わせ、申込みが続きました。「あらためてビキニ事件の重みを感じた。死の灰はいまも乗組員の心も命も暮らしもいため続けているんですね」「映像の美しさ…。その逆に核兵器を開発する人びと、事件の処理にあたった人びとのなんと醜いことでしょう」、感想のほかに「亡くなった夫が夢の島の船をよく描いていました。なつかしく泣きながらみました。その絵を探して展示館を訪ねたい」と中野区の婦人からの声も寄せられました。

放送の後の来館者も多く、非核の政府を求める会の展示館紹介のビデオ撮影や、日本赤十字看護学校の若い生徒さん、気象庁の労働組合、大田区の病院平和サークル、非核世田谷連絡会の見学会など小グループによる見学が続きました。

高校生の平和行脚が旅立ち

五月一日、川崎市の「のむぎO・C・S高等部」の若者約三十人が来館、「なんでも体験」と、船の奥にまで入って「実体験」をしました。

高校を中退した若者へ「地域の中で生きる力を身につけ方向を見つける」とユニークな教育活動を進める川崎市麻布区の私設学校「のむぎオープン・コミュニティー・スクール」の若者たちで、先生の樋口夫妻ともども二時間余、生きと船と対話しました。昨年に続き、学校から長野県小谷村栂沼のほとりまでテント生活をしながら歩いて旅をする体験学習「高校生三〇〇キロ平和行脚」を今度は自分たちだけで企画、五月九日、夢の島第五福竜丸展示館から広島に向け出発する「国民平和大行進」に相呼応し、地域の人びとと交流しつつ、第五福竜丸の願いと川崎市長の平和メッセージを平和宣言の小谷村村長に届けようと、出発に先だって展示館見学を行なったものです。展示館からも「のむぎのようにたくましく第五福竜丸のように大きく、ひたむきに」と激励のメッセージをおくりました。

夢の島公園管理所に要請

四月中旬、川崎会長が夢の島公園管理所を訪問、同所の志村所長と展示館の充実につき懇談しました。

新しく会員に

新年度の会費の納入のお願いと共に賛助会員加入のお願いをしていましたが、このたびつぎの方々が会員になって下さいました。

岡本三夫、立花誠逸、みなと印刷企画、前島明、山田英二

（敬称略）

ビキニの海は忘れない⑦

被災船を追う高校生たち

山下正寿

高知県の片隅にある幡多地域から始まったビキニ被災漁船員調査は、高校生たちに受け継がれて八年目を迎えた。

幡多郡にある漁村には、どこにもビキニ事件に関った漁船員がいた。そして、彼らの体験談は、具体的であり、歴史の証言者として高校生たちの学習意欲をかきたてた。調査がすすむほどに、巨大なビキニ事件の実相が浮かびあがり深刻な被災漁船員の健康状態を知り、「何とかしなければ」と行動を広げてきた。

東京・第五福竜丸展示館から焼津の久保山すずさん宅へと第五福竜丸事件を現在の問題として学んだ。そして、長崎・口ノ津町から広島・岡山へと被災貨物船弥彦丸を追跡した。さらに、沖縄に行き隠されたビキニ事件の解明にいどんだ。

被災漁船員への聞きとり調査

高校生たちがこの八年間、ビキニ事件を追いつづけたのは、この深刻な事件にも人々のロマンや生きる力を感じつづけたからだろう。被災漁船員や家族の人たちは、事件をひきづりながらも、美しい海への想いを忘れず、懸命に生きようとしている人たちが多かった。非力な高校生たちにも期待を寄せ、熱っぽく語りかけてくれた。

高校生たちは、学習・調査から表現へと重点をうつしてきた。自分たちの学んだことをもっと多くの人々に伝えなければ、関係者がいなくなることで再び事件が闇の中に消されてしまう――と感じ、合唱構成詩をつくった。

スライドを上映しながら、オリジナル曲を歌い、藤井節弥さんや谷脇正康さんなど若い被災者の声をナレーションで伝え、自分たちがビキニ事件から学びとったものを率直に表現した。

又、こうした活動が、ドキュメンタリー映画「ビキニの海は忘れない」の制作へと発展した。森康行監督は、ビキニ事件と高校生の春青像を結びつけ、二年間に渡って彼らを記録しつづけた。フィルム編集を終り、最後にナレーションを吉永小百合さんにやっていただき映画は一九九〇年三月一日に封切された。

反響は予想以上に強く、高知県内で四〇〇〇名の人たちが地域上映会に参加してくれた。私たちが驚いたのは鑑賞後の感想文の提出率が半数近くになる会場がほとんどだったことだ。感想は、「高校生になったらこんな活動をしたい」（中学生）、「たくさんの人たちにこの映画と出合うチャンスをつくれば大きな影響、生きることの意義みたいなものを与えることができるような気がする」（高校生）、「我々社会人が高校生の活動を見て恥しく思った」「実感！私は第二幸成丸乗組員」など多様なものだった。

映画は、観た人が自発的に上映会を組織していただき全国的に拡がった。この年の一一月にドイツのライプチヒ国際映画祭に代表作品として参加し、キネマ旬報文化映画ベストテンに選ばれ、日本映画復興会議奨励賞、日本映画ペンクラブ優秀作品、日本記録映画作家協会賞を受賞し、文化的な評価もいただいた。

映画の拡がりと共に、ビキニ事件の全国調査が拡がって欲しいという願いにこたえて、今各地から調査の動きが伝わってきている。「私たちの住んでいる地域から核問題がとらえられた」――ビキニ事件は今も生きている核廃絶への若い世代のテーマである。（完）

（高知県ビキニ被災調査団員）

〈参考文献〉

「ビキニの海は忘れない」平和文化

「海光るとき」　民衆社

「ビキニの実相」　調査団

VTR 映画「ビキニの海は忘れない」（45分・62分）

核開発競争が残したもの②

プルトニウムをめぐる選択

斗ケ沢秀俊

「プルトニウム大国」になるのか否か。日本はいま、重大な岐路に立っている。

英仏からの返還プルトニウムの輸送、プルトニウムを生み出す使用済み核燃料再処理施設の着工、プルトニウムを燃やす高速増殖炉「もんじゅ」の臨界が、今年から来年にかけて相次いで予定されている。

国際的に関心を集めているのは、英仏からのプルトニウム海上輸送だ。日本の原発から出た使用済み核燃料の一部は、英仏の再処理施設で再処理され、プルトニウムが分離・抽出される。これが今秋の一トンを皮切りに、二〇一〇年までに約三〇トン返還される。

日本の計画では、プルトニウムは英国の輸送専用船を改造した輸送船で運び、海上保安庁の新造巡視船「しきしま」で護衛する。

米国の議会などには、輸送計画の見直しを求める声が出ている。護衛能力の限られている巡視船一隻では輸送中の事故や核ジャックに十分対応できないとの理由に加え、核拡散防止の見地から、日本が大量のプルトニウムを保有することへの懸念もあるようだ。

「核拡散防止」は核兵器保有国に都合の良い論理であるから一概に賛成できないが、事故を防ぐため、保有量や輸送をできるだけ押さえるのは当然だろう。

プルトニウムはよく知られているように、長崎の原爆やビキニ水爆の起爆剤に使われた核物質であり、化学的毒性も強い。

そもそも、危険性の高いプルトニウムを利用する必要があるかどうかが問題だ。

原子力委員会は二〇一〇年までの需給見通しを明らかにしている。供給は英仏からの返還分や青森県六ケ所村の再処理施設での抽出量など計約八五トン。これに対し、高速増殖炉や新型転換炉、さらにウランと混ぜたMOX燃料を既存の原発（軽水炉）で使うなど計八〇―九〇トンの需要があるとしている。

使用済み核燃料から抽出したプルトニウムを高速増殖炉で燃やすプルトニウム・リサイクル政策を選択した背景には、近い将来ウランが枯渇する時代が来るとの予測があった。

ところが、ウラン価格は長期にわたり低迷している。今後、核兵器削減に伴い、ウランやプルトニウムが大量に発生する。この先数十年、原発燃料の供給面での心配はない。

科技庁はプルトニウムを準国産エネルギー資源と位置付け、「エネルギー自給率の向上と資源の有効利用のため、リサイクルは必要だ」との方針を変えていない。

しかし、現実には高速増殖炉や新型転換炉は開発計画が順調ではなく、コストが高いため電力会社が必ずしも乗り気ではない。MOX燃料の利用も同様にコストが高いし、安全性が保障されていないから、原発を抱える自治体や住民の反発が予想される。

使い道がないままプルトニウムの保有量が増え続ける恐れは多分にある。「需給のバランスを取り、使う分しか再処理しない」という路線を守るならば、再処理施設への巨額の投資がほとんどむだになるだろう。

もう一つ、問題点がある。

科学技術庁は「核ジャックなどに備えるため」として、海上輸送の日程やルート、輸送量などを一切明らかにしていない。また、国内の核物質輸送に関係する地方自治体や事業者に対し、同じ理由から、輸送日程や種類を公表しないよう通知した。これまで一部の自治体が報道機関を通じて公表していることにストップをかけるためだ。

科技庁は核物質防護という大義名分を掲げているが、これでは輸送の際に核物質が漏れる事故が起こったとしても、「核物質防護」のため公表しないことになりかねない。

プルトニウム利用のメリットは現在、ほとんどない。従来のリサイクル政策に固執することなく、抜本的に見直すべきだと思う。

ジャーナリスト